



第1回 杉本哲郎「舍利供養」に秘められた 師・春拳への想い

令和5年（2023年）5月24日（水）

滋賀県文化財保護課兼琵琶湖文化館 井上優

杉本哲郎「舍利供養」に秘められた 師・春挙への想い

滋賀県文化スポーツ部文化財保護課

美術工芸・民俗係兼琵琶湖文化館 井上 優

本日の論点 琵琶湖文化館の壁画「舍利供養」

- 落款の署名と印影の矛盾を説明 署名＝哲郎 印文＝春江
- 矛盾の背景を考察 作者・杉本哲郎の真意、深意を推測
- 壁画「舍利供養」の真の価値を知る

●今回の主役

琵琶湖文化館別館の巨大壁画「舍利供養（しゃりくよう）」

- * 杉本哲郎（1899～1985）の作
- * 中央画面 367.5×368.5cm
中央に仏舍利を奉安する舍利塔、左右に像身高各3mの巨大菩薩像
向かって右菩薩 右手に蓮華を持つ、宝冠に化仏（阿弥陀）＝観音菩薩
向かって左菩薩 両手を合掌 図像は不明だが観音と一対 推定勢至菩薩
天空を舞う天人、無憂樹上の迦陵頻伽、供花を捧げる小菩薩
- * 向かって右脇画面 188.0×514.0cm
舞踊し、また蓮華を捧げ飛行する11菩薩、および帝釈天
- * 向かって左脇画面 188.0×514.0cm
楽器をもち、音楽を奏でる13菩薩、および梵天
正倉院宝物・螺鈿紫檀五弦琵琶なども描かれる



作者の署名・落款印

- ・ 墨書署名「哲郎」
- ・ 朱文方印 印文「春江漁夫」、印郭4.0×4.0cm
- ・ 作者＝杉本哲郎

①滋賀県大津市生まれ、本名：哲二郎

父の出身地は長浜町（長浜市）、母の出身地は坂本村（大津市）

②世界的な「宗教画家」

③日本画家・山元春挙に入門。「春江」号で帝展入選するも破門

④インドの古代壁画等に学んで、独自の画境を開く

⑤1949年（昭和24）滋賀県立産業文化館壁画を描く

1960年（昭和35）滋賀県立琵琶湖文化館に移設「舍利供養」

壁画の署名「哲郎」（新号）と印文「春江」（旧号）に矛盾⇒大きな謎

1. 産業文化館での作品成立と画題「来迎図」

○作品の成立 1949年（昭和24）

- ・ 10月31日 壁画受納式
- ・ 県知事→哲郎 感謝状

「貴下が熾烈なる郷土愛と芸術奉公の熱誠を以つて滋賀県立産業文化館に揮毫せられました壁画『来迎図』を受納しますことは洵に感銘に堪えません。」

作品名 「舍利供養」ではなく「来迎図」だった

- ・ 滋賀県立産業文化館＝琵琶湖文化館の前身
 - 武徳殿を改修して生まれた「産業と文化の殿堂」
 - 滋賀県初の、本格的公立博物館施設
 - 収蔵庫新設のために増設した土壁の、展示室側に描いた

【揮毫日数表】

杉本哲郎 9月16日～10月31日、11月27日～12月12日	計62日
村山好生 9月19日～10月31日	計43日
西村魁人 10月2日～10月6日、10月21日～10月24日	計9日
野口茂彦 10月1日、10月2日、10月16日、10月23日	計4日
小杉泰作 10月3日～10月6日、10月21日～10月23日	計7日

- 壁画の前面には、当初仏像（丈六仏）を展示していた

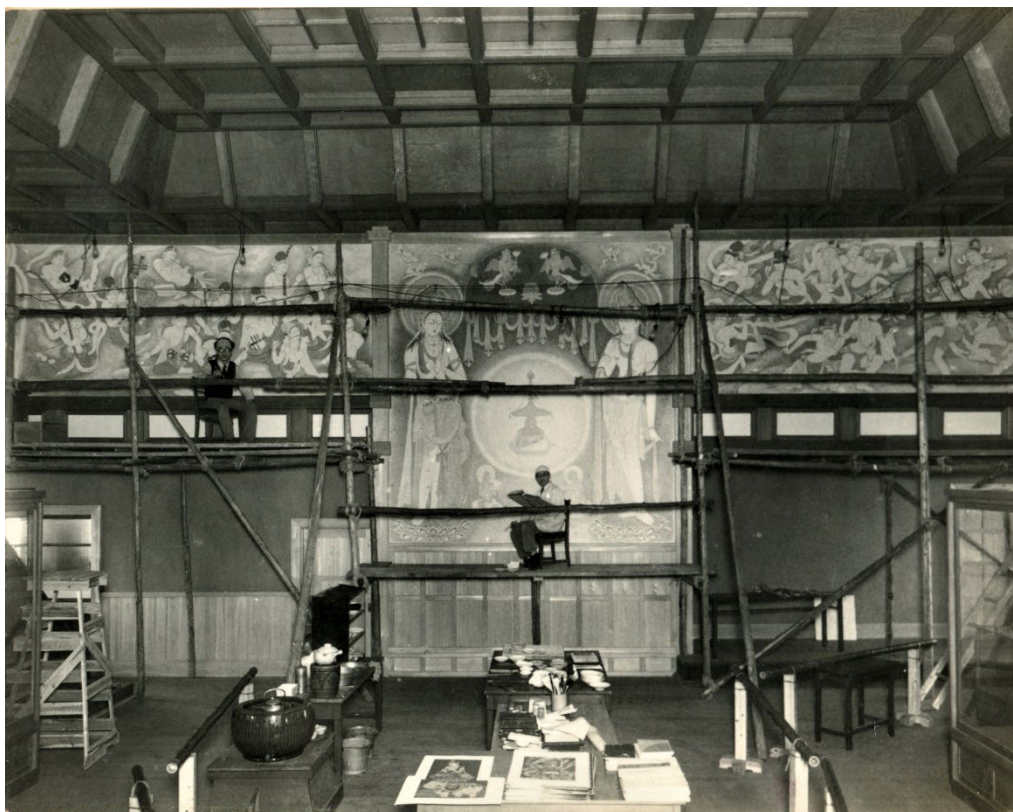
重文木造阿弥陀如来坐像（湖南市長寿寺所有）

本尊となるべき阿弥陀如来像がある以上、ここに新たな本尊を描く必要はないとの見解に至った。

そこでこの丈六の阿弥陀如来坐像を本尊に見たて、観音・勢至の両菩薩を脇侍として描くことになったのである。

（学芸員・宇野茂樹氏から聞き取り）

- 阿弥陀如来を主役とする絵画→「来迎図」＝自然



壁画「来迎図」制作中の杉本哲郎と村山助手（1949年10月）

2. 琵琶湖文化館への作品移設と改題「舍利供養」

(1) 阿弥陀像の返却 1951年(昭和26)

- ・ 重文阿弥陀如来坐像を長寿寺へ返却
作品名「来迎図」が不自然となった
→中間的な作品名「来迎・舍利供養図」時代

(2) 壁画の受難 1954年(昭和29)

- ・ 知事の交替
服部岩吉×森幸太郎 盟友から政敵へ、知事選挙で対決→森の勝利
森、12/10就任 服部県政での事業打ち切り、「修正」に着手
服部の発案で設立の産業文化館も、「修正」のやり玉に
用途変更して武徳殿に復帰 ←12月議会承認
- ・ 収蔵品 ●一部の寄託品を返還 ○大部分は滋賀会館へ引継 場所変えつつ公開活用
壁画 ●動かすことができず ○作者=杉本哲郎の困惑

(3) 杉本哲郎の要望 1955年(昭和30) 12月6日

- ・ 哲郎→辻田太一県議会議長へ
仏界のすがたを描いた平和像の前で剣術をやられては
芸術家としての良心がゆるさぬ
●他の適当な場所に移すか、それがダメなら消してほしい
県警本部長「今の武道は全くスポーツとしての明るいもの」
→存置に理解求めるコメント



(4) 壁画切り取りと仮保管 1956年(昭和31)

- ・ 切り取って、三井寺下の警察機動隊に運搬して保管
●あくまでも緊急避難
→課題残るが、産業文化館長・草野文男も異動

(5) 琵琶湖文化館の建設へ 1958年(昭和33)

- ・ 再び知事の交替 森幸太郎→谷口久次郎
●産業文化館長・草野文男が1959年2月1日に復帰
→湖水に映ゆる鉄筋コンクリート造、天守閣様式の総合文化館建設計画発起

(6) 琵琶湖文化館への移設 1960年(昭和35)

- ・ 11月26日 建設中の文化館へ搬入開始
- ・ 11月10日～13日 別館内で掲示作業
- ・ 12月18日 「壁画修め式」斎主=村山好生(哲郎の弟子、壁画制作助手)

(7) 琵琶湖文化館の開館 1961年(昭和36)

- ・ 琵琶湖文化館別館壁画「舍利供養」となる



壁画の移設(1960年11月)



3. 山元春拳と杉本「春江」号

(1) 杉本哲郎の初号「春江」 1914年（大正3）

- ・ 師、山元春拳（1872～1933）から与えられる（15歳）

(2) 「春江」号にこめられた、師・春拳の想い

- ・ 「春」字を山元春拳から与えられた弟子⇒あまり多くない

春拳門の四天王 ●川村曼舟 ●小村大雲 ●庄田鶴友 ●服部春陽

その他の門人 ●植中直斎 ●勝田哲 ●小早川秋聲 ●柴田晩葉 ●西井敬岳
●古谷一晁 ●案本一洋 ●三宅鳳白 ●森公拳

- ・ 「春」の付く弟子

- 服部春陽 京都出身
- 山元春汀（のち桜月） 滋賀（膳所）出身=甥（姉の子）
- 疋田春湖 滋賀（膳所）出身 旧膳所藩士の子
- 中野春郊 滋賀出身（詳細は不明）
- 杉本春江（のち哲郎） 滋賀（大津）出身

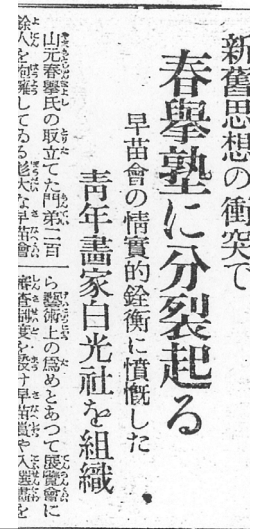
「春」号に込められた、同郷意識と親近感、期待感

- ・ 近江出身の同郷意識

- 杉本春江（大津出身） 父は長浜町、母は坂本村の出身
母の父=国学者・景山豊樹⇒春拳の父・山元善三郎の師
春拳→入門時の哲郎 「江州人らしゅう、しっかり勉強してくれや」

(3) 「春江」号の作品

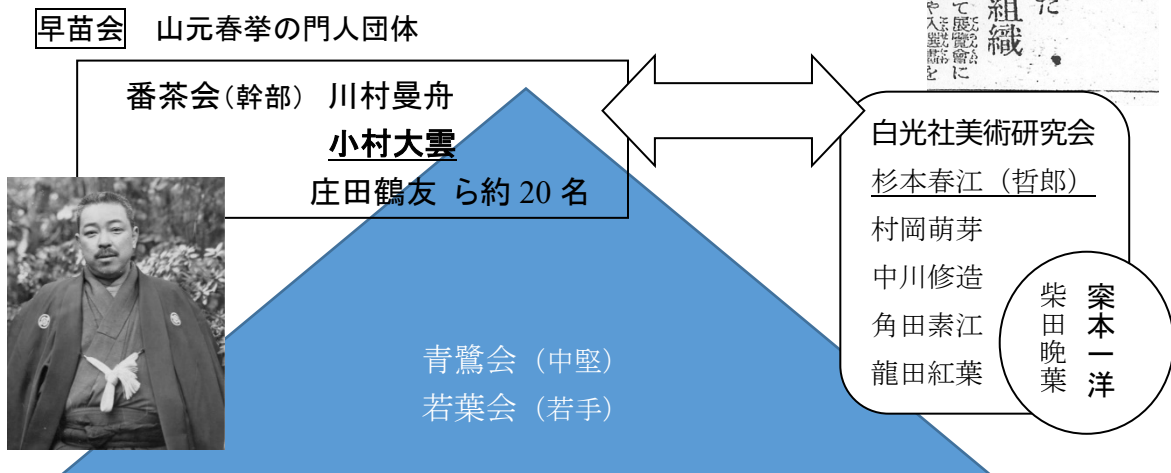
- ・ 史料上の初出=1917年（大正6）明治絵画会褒章受章作「春暖」 18歳
- ・ 現存作品の署名、落款 * 栗東歴史民俗博物館（1998）、長浜城歴史博物館（2022）図録から
- ・ 現存最古=1920年（大正9）「桃」 21歳
この年京都市立絵画専門学校卒業、白光社美術研究会を結成
以後、1924年（大正13）までの間に「春江」署名の7作品を確認
* 「春江漁夫」印を捺した作品もある



4. 破門、「春江」から「哲郎」へ

(1) 白光社結成から早苗会分裂へ 1920年（大正9） 21歳

- ・ 京都市立絵画専門学校卒業、白光社美術研究会を結成
- 陰影法の使用などをめぐり、早苗会の幹部と若手が対立



小村大雲（春江の作品について）

「西洋画にかぶれた邪道作で、早苗会の指導精神にも違反」

(2) 帝展初入選 1922年(大正11) 23歳

- ・ 「近江富士」で初入選 ← 厳しい自己批判「私の下等な現在の作品」
- 早苗会の「指導精神」の範囲内では得心できず

(3) 早苗会退会 1923年(大正12) 24歳

- ・ 白光社の解散命令に反発
- 早苗会(春挙塾)の立場からは「破門、除名」

(4) 春江号を捨てる 1924年(大正13) 25歳

- ・ 春挙塾の「破門」から一年 ← 従来説は誤り

(5) 哲郎号を名乗る 1925年(大正14) 26歳

- ・ 春挙塾の「破門」から二年 ← 従来説は誤り
- 「五月の野道」(京都市美術館蔵) 楷書で「杉本哲郎」 * 姓を記す唯一事例

5. 変わらぬ敬意と「真の後継者は僕」

(1) 従来イメージ

- ・ 哲郎×春挙 深い決裂
- 哲郎は、春挙の権力濫用ぶりや私生活の放漫さに反発
- 破門後、ことあるごとに「影」に行く手阻まれる
 - ← 評伝 正井尚夫『杉本哲郎の生と死—円山の花のかすみを—』
 - 哲郎からの聞き取りによる豊富な内容
 - 物語形式のため著者による主幹の反映や脚色が強く、注意を要する
- ・ 哲郎×春挙 新聞小説のモデルとして好奇の目
- 日本中の部外者が、スキャンダラスに認識
 - 「沈丁花」久米正雄作、堂本印象挿絵(『東京日日新聞』『大阪毎日新聞連載』連載)
 - * 主人公・野村白鳳のモデル=哲郎

(2) 師に敬意、画業を真に継ぐのは自分

- ・ 1936年(昭和11)2月20日付『金沢新報』
- 哲郎の個展開催を報じる記事の関連インタビュー記事
- 「春挙画伯の後継者は僕」と主人公杉本氏は語る



市内上柿木島藤屋旅館のおくまった一室にロマンスの主人公杉本画伯をとへば俊英な面をかぐやかせてかたる(中略)「僕は先生(山元春挙画伯を指す)の真の後継者は僕だと信ずる、何故ならば先生はその恩師の凡てを習ひつゝして更に自己の境地を拓かれた、だから僕も先生から出て先生とは異つた僕の境地を拓かうと——いま現に拓きつゝあるのです、弟子が師の境地から一步も出ることができなかつたらそれは師の亜流となることにすぎない、しかし僕が何を完成したかといはれ、ば何も完成してゐない、何も完成してゐないといふところに僕達青年の力が希望があるのです、六日から旅に出ます、そして何かをつかんで帰りたいと考へてゐます、絵のためにかけた僕の生命ですから倒れるまで描きつ々けたいと思ひます」と力強くかたつた

主人公杉本哲郎君
ひよつこり金澤へ
反逆十年の成果を擧げて
くしきゆかりの地へ!

父母の関係で
金澤が懐しくなり

「春挙画伯の後継は僕」と

杉本氏は語
「僕は先生(山元春挙画伯を指す)の真の後継者は僕だと信ずる、何故ならば先生はその恩師の凡てを習ひつゝして更に自己の境地を拓かれた、だから僕も先生から出て先生とは異つた僕の境地を拓かうと——いま現に拓きつゝあるのです、弟子が師の境地から一步も出ることができなかつたらそれは師の亜流となることにすぎない、しかし僕が何を完成したかといはれ、ば何も完成してゐない、何も完成してゐないといふところに僕達青年の力が希望があるのです、六日から旅に出ます、そして何かをつかんで帰りたいと考へてゐます、絵のためにかけた僕の生命ですから倒れるまで描きつ々けたいと思ひます」と力強くかたつた

- ・「先生」の真の後継者は自分だという、絶対の確信と決意
←春拳とその画業への強い敬意なしには生まれない意識

(3) 師に敬意、晩年まで変わらず

- ・ 1982年（83歳）『湖国と文化』巻頭言 杉本哲郎「個性的な湖国文化を」
●湖国文化の先人として 霊仙、最澄、円仁、円珍、源信、良源、中江藤樹、杉浦重剛、小堀遠州、海北友松、吃又平、西田天香を掲げ
「そして山元春拳先生（私の旧師）など多士済々である。」と叙述
歴史的な偉人の列に、尊敬する旧師を推挙

(4) 師とは心の和解を果たしていた

- ・ 1933年（昭和8）7月『杉本哲郎画集及画論』（アトリエ社）を出版
●画集出版会に、師を招待
●春拳から自筆の返書
「あれ（破門）以来きみは熱心に勉強していると聞いて陰ながら喜んでいる。こんどアトリエ社から立派な本を出したとのこと。春拳塾では、これまで誰一人画集など出したものはなく、きみが最初の人だ。自分は何をおいても祝いに行きたいと思うが、病中でからだの自由がきかぬので失礼する。」

⇒7月12日、山元春拳逝去（享年63歳）

(5) 師の葬儀参列を阻まれた（正井尚夫『杉本哲郎の生と死—円山の花のかすみを—』）

- ・ 京都大徳寺（Wikipedia では7月15日等持院）
●霊前に画集を捧げようとする哲郎を、小村大雲が大声で阻止
「破門者は近づいてはならん」
●師に別れを告げられず ⇒深い悔恨
画によって師を追悼する必要に迫られた

6. 鎮魂と供養の画墓「春江」印を捺した、杉本哲郎魂の傑作

(1) 哲郎が壁画に仏舎利を描いた謎

- ・ 丈六阿弥陀如来坐像の背景に「来迎図」を描くにあたって、仏舎利は必須ならず
来迎図＝阿弥陀信仰 × 仏舎利＝釈迦信仰

(2) 哲郎が壁画制作に抱いた思い

- ・ 本格壁画論「建造物の持つ使命、精神を象徴する意図によって描かれるべき」
●産業文化館の設立精神（服部岩吉）「産業と文化の殿堂」
●壁画の背景（草野文男）「平和を象徴して本邦随一を誇る壁画が生まれた」
・ 戦後の日本＝戦争による深い傷跡が残る
平和への祈り＝先人の慰霊・鎮魂と一体
壁画の背後に打ち付けられていた納入品の蓋裏にも「平和」の文字（草野文男書）

(3) 描かれた仏舎利

- ・ 戦争の時代に失われた人々の遺骨
- ・ 近江の先人の靈魂の象徴
壁画の前に立つ人はみな、おのずと自分の大事な人の魂に向き合う
観音勢至や諸菩薩が来迎し、観覧者ごと「浄土」へと導く

(4) 「春江」印 押捺の意図

- ・ 哲郎にとっては、師・春拳の遺骨

- ・ 真の後継者として、師を鎮魂供養する「画墓」
 - それであればこそ、大正13年以後封印していた「春江」号の印を、ただ一度だけ捺したのでは？

まとめ

「来迎図」改め「舍利供養」

- 杉本哲郎が師・山元春拳の追悼、鎮魂の思いを込めて描いた「供養」の仏画＝画墓
- 春拳の後継者を自認する哲郎が、ふたりの故郷である滋賀県に残した記念碑的代表作

* インドの宗教壁画を学び、「本格壁画」にこだわった杉本哲郎

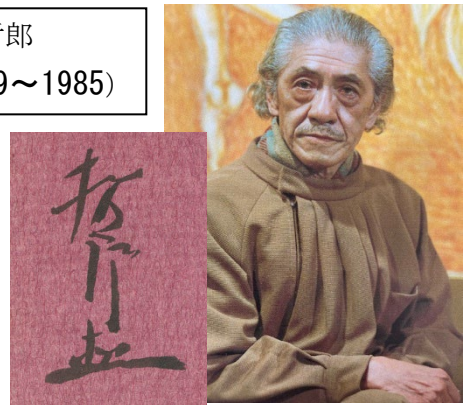
だが、これほど大規模な菩薩像を描いた壁画は他にない

○明快な画面で、制作の意図も重要

○50歳、壮年期の大作として抜き出た傑作

令和9年、新しい琵琶湖文化館に移設して未来の県民へ美の魅力を伝える

杉本哲郎
(1899~1985)



主な参考文献

- 『滋賀県立産業文化館報告書 1』滋賀県立産業文化館、1950
- 『滋賀県立産業文化館報告書 5』滋賀県立産業文化館、1955
- 滋賀県立琵琶湖文化館所蔵公文書「壁画関係書類綴」、1960
- 杉本哲郎作成履歴資料・スクラップブック（杉本太郎氏所蔵）
- 杉本哲郎『杉本哲郎画集及画論』アトリエ社、1934
- 杉本哲郎『私の幼少時代』白川書院、1963
- 杉本哲郎『津村別院壁画』本願寺津村別院、1969
- 杉本哲郎「こんな幸せ、おへんで」『わが人生のとき』毎日新聞社、1976
- 杉本哲郎「個性的な湖国文化を」『湖国と文化』第20号、1982
- 正井尚夫『宗教画家杉本哲郎の生と死』ミネルヴァ書房、1985
- 『20世紀物故日本画家事典』美術年鑑社、1998
- 石丸正運編『近江の画人』サンライズ出版、2020
- 企画展『宗教画家 杉本哲郎』展示図録 栗東歴史民俗博物館、1998
- 企画展『杉本哲郎—長浜ゆかりの偉大な芸術家—』展示図録 長浜城歴史博物館、2022
- 亀田正雄「宗教画家の巨人、杉本哲郎」（企画展『宗教画家 杉本哲郎』所収）1998
- 井上ひろ美「杉本哲郎」（石丸正運編『近江の画人』所収）2020
- 伊東ひろ美「杉本哲郎の『日本画観』」（『宗教画家 杉本哲郎』所収）1998
- 坂口泰章「杉本哲郎の生涯と画業—近現代における新たな仏像の創出—」（『杉本哲郎』所収）2022
- 出雲一郎「杉本哲郎の長浜物語」①~⑭（『滋賀夕刊』第16823~16846号）2022